

建築大辭典

ENCYCLOPEDIA
of
ARCHITECTURE and BUILDING

第2版

彰国社

装 幀／原 弘
山崎 登 (NDC)

序

本邦において建築辞典上梓の嚆矢と目されますものは、故中村達太郎博士による「日本建築辞彙（1906刊）」であろうと思われまゝ。当時、未だ揺籃期に在った我が国建築界において、氾濫する多種多様な建築のことは的確な定義を与え、学問発展のために共通言語の整理を図られたその努力と功績とは、既に七十年を経た今日においても猶その輝きを失っておりません。

第二次世界大戦後、廃墟の国土再建から再出発した我が国建築界は、以後国交の回復に伴い諸外国からの彪大な情報の流入によって約十年の空白を埋めてなお余りある急激な発展を見るとともに、当然のことながらそこには全く新しい造形概念や技術、そして新材料等が次ぎ次ぎに誕生しました。すなわち第二の黎明期であったといえましよう。

これらの強烈な刺激により、伝統的な日本建築を基盤とする我が国の建築のことは急速に膨張し、複雑化し、遂には語義の混乱をすら招来するに至りました。

ことは常に時代と共に流動・変化してゆくものでありますが、決定的な意味を持つべき学問を情報として形成することばの解釈は不動のものであらねばならぬ筈であります。しかし趨勢は覆うべくもなく、これが一時点を画して正確な共通言語を持つための再整理が強く要望される所以であり、本辞典刊行の意義もまたここに存在するのであります。

本辞典刊行の企画開始は、遠く昭和25年に遡ります。爾来二十有

目 次

序

第2版の序

編集委員・執筆者

凡 例

語 彙

付 録

英和対照語彙集

難読語集

付図・付表

余年、その間幾度か執筆直前の段階にまで到達しながら、変転極まりない社会情勢ないしは諸条件の不備により振り出しに戻って再検討を行わざるを得ない状況に遭遇し、最終的に編集開始に踏切ったのは、実に昭和42年の春であります。

幸い編集委員各位の卓越せる能力と情熱とに加え、百数十名に垂んとする各専門分野第一線の学者・技術者の方々から成る執筆陣の積極的なご協力を得て、漸くここに私の生涯の念願が結実するのを見ることができましたことは洵に喜ばしく、まさに建築辞典の決定版として比類なきものをつくり得たと、満腔の自信を持って斯界におくるものであります。ややもすれば閉鎖的であった日本の建築学の分野にも、近年俄かに他分野との接近・交流が始まり、近い将来において建築学は学際領域を包括しながらますます発展拡大され、更に多様化の度合を増すものと思われます。これらの予測に加えて出版の常道からしても、本辞典の刊行によってことばの整理の終了を意味するものではなく、まさに開始されたというべきでありましょう。

今後、広く江湖の諸賢のご教示を仰ぎ、時宜に応じて補遺あるいは改訂を行ってゆくことにより無限の生命を保持させ、常に、斯界の読者の好伴侶たり得ますよう社を挙げて育ててゆく決意しております。

ここに生み出せる者の責任の重さを痛感しつつ、改めて編集委員各位並びに執筆者各位の永年のご苦勞に対し、深甚なる感謝と敬意を表します。

昭和49年6月1日 創立記念日に方り

彰国社社主 下 出 源 七

第2版の序

本辞典が、高い志と、それに共感を寄せられた編集委員諸先生の卓越せる能力と情熱に加え、百数十名に垂んとする各専門分野第一線の学者・技術者から成る執筆陣のご協力のもとに刊行をみて以来斯界唯一の本格的辞典として年々版を重ね、建築関係はいうに及ばず、隣接する広範な分野の圧倒的な支持を得てまいりました。

この間、建築をとりまく環境と建築を創る技術は、まさに目を見張るばかりの変容・進歩を遂げてまいりました。とりわけ意識・価値観の多様化がもたらす表現の多様性、環境と資源の保護、そしてコンピューターの進歩・普及を背景として登場したハイテク技術は、その関連情報の著しい増加をきたしました。そして今、広く社会現象として指摘されていることばの氾濫は、情報伝達の共通言語として、その語義が定着しないままに次のことばに増殖するという憂慮すべき現象を繰り返しているやにみえます。一般に、辞典は「刊行の瞬間からして既に補訂」の必要があるといわれます。本辞典にも「時宜に応じて補遺あるいは改訂を行ってゆくことにより無限の生命を保持させ……」と刊行の序に記しましたように、われわれには、このことばの正しい語義における定着を見極め、記録していく使命があります。ここにおいて、建築大辞典の一新と、更なる充実が社会的要請と作るものの意志によって画されるのは当然のことといえましょう。幸い、初版刊行以来18年、貴重なデータも蓄積されてまいりました。

改訂の眼目は、当然のことですが、新語の採録であります。こと

ばの混乱を整理し、進歩を将来へつなぐ作業を開始しなければなりません。コンピューター関連用語、計画分野における環境や景観および不動産用語、施工分野に著しい新技術およびロボット用語など新しく取り込む分野を視野に入れて全語彙を再検討し、あわせて新項目の追加を行いました。

全語彙再検討の結果がもたらした英和対照語彙集の大幅な増補にはデータとしての読者の声が生かされました。このことは、建築歴史分野で建築儀礼、民家、和船などの用語をも広く収録し、特に伝統的な空間作法や室礼といった現時点で記録しておかないと消滅するおそれのある古語の収録という他に類のない本辞典の特徴と共に大方に利便すると考えます。そのほかにも、従来のさまざまな特色を継承しながら新しい試みも随所に加えました。

ここに第2版として大改訂をなし得ましたのは、ひとえに校閲・執筆の労を惜しまれなかった編集委員・各界専門家諸先生のご厚情の賜物であります。心よりお礼を申し上げる次第です。この労が建築を次世紀へつなぐ確かな作業の一つであることを信じて疑いません。

最後に、本版は全面改訂の新版ですが、旧版がその基礎になっておりますことはいうまでもありません。末尾ながら、初版以来ご協力・ご教示をいただいてまいりました諸先生、そして多方面からの読者のご支援にも、改めて同様の謝意を表します。

平成5年5月

株式会社 彰 国 社

VIII

編集委員
(50音順)

法政大学名誉教授 工学博士 青木 繁
 阿部 公正
 元 工学院大学学長 工学博士 伊藤 鄭爾
 (株)建築設備設計研究所代表取締役 犬塚 恵三
 東京大学名誉教授 工学博士 内田 祥哉
 工学博士 岸谷 孝一
 福井大学名誉教授 工学博士 城谷 豊
 都市環境研究所所長 土田 旭
 東京都立大学名誉教授 工学博士 長倉 康彦
 平沢 克彦
 元 昭和女子大学教授 渡辺 敬三

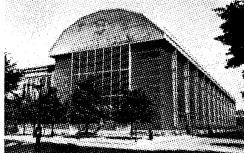
執筆者 および
 編集協力者
 (50音順)

相川 新一	和泉 意登志	大熊 喜光	金沢 京子
青木 繁	磯辺 行久	大熊 孝重	加納 国雄
青山 幹	磯村 涉	大墨 宗重	蒲池 紀生
赤堀 弘	井出 建	太田 昭夫	川口 衛
赤間 正邦	伊藤 鄭爾	太田 邦夫	川瀬 清孝
安達 洋	伊藤 登	大森 博司	川添 俊之
阿藤 友樹	稲葉 和也	岡田 一章	河原 武敏
阿部 祥子	乾 亮三	岡田 一重	菊池 康朋
天野 光一	犬塚 恵三	岡部 徳一郎	岸谷 孝一
新井 一彦	猪爪 範子	岡本 直	北村 義雄
荒木 睦彦	今泉 勝吉	岡本 嘉行	城戸 修造
安藤 幸喜	岩下 秀男	小川 信子	木野 信之
安藤 義久	岩田 秀行	小川 晴果	木村 昌夫
安藤 忠夫	上島 顕	沖塩 莊一郎	木村 敏行
飯島 祥二	上野 淳	奥野 智久	久保 陽一
飯沼 秀晴	植松 貞夫	小滝 一正	窪田 陽一
井口 洋佑	碓井 憲造	小谷 俊徳	久保 寺三
井口 正志	内田 祥哉	小野 義治	黒木 早苗
池田 昭治	江口 禎	加賀 英雄	黒田 隆雄
石井 謙朗	越後 島研一	加島 嗣穂	黒田 虎雅
石井 義利	遠藤 二三男	片桐 正夫	毛 池 迪夫
石橋 彦治	大井 謙一	片桐 正夫	
石丸 辰	大方 潤一郎	角田 隆司	

小泉嘉四郎	鈴木勝	仲隆介	福沢宗道	本橋健司
洪起	鈴木良一	川雅永	伏見賢一	森戸正昭
越部孝豐	瀬川根孝	長倉澤郁	藤井正一郎	森谷俊夫
小島一雄	関根啓治	長沢島	藤上輝之明	八木沢壯一
後藤哲雄	副島彬重	長沢島	藤木秀義	野安智博
小早川敏弘	高瀬田信孝	長島田	藤谷越徹	安吹茂義
小林重秀樹	高橋公孝	中田昌	船野修	矢岡門明
小林林勝	高橋修一	中谷西	舟布川	山山川
小原二郎	高橋敏元	中沼野	古屋野	山山口
近藤照基	高山田	中須川	堀前	山山下
近藤基潮	高山田	成瀬南	前野	山山田
斎藤隆幸	竹本克彦	西岡利	前野	山山原
斎藤辰彦	竹本雄三	西田和	牧野重	山山室
斎藤公正	田中享二	西野間	益益松	山山本
坂井博司	田中明	野村みどり	松松松	山山油
佐々木健夫	田中豐	服部本	松下松	山山油
佐藤邦夫	田波徹	橋本本	松下松	山山油
佐藤貢夫	谷村秀彦	橋本本	松島道	山山油
沢田凱夫	田村幸生	橋本本	松本信	山山油
仕入豊和	多羅建治	長谷川	松本正	山山油
塩倉祐光	地原大五郎	初原	松真丸	山山油
篠原良一	塚田耕一	播半	三水	山山油
清水裕彰	塚田耕介	比久	水道	山山油
下村藤由	土谷昭一	一家	三三三	山山油
白井豐志	常鶴	平沢	三三三	山山油
城宮清進	鶴田	平沢	三三三	山山油
新菅原田	鶴寺	平手	三三三	山山油
菅杉藤賢	寺土登	平野	三三三	山山油
杉本崇司	土岐坂	深浦	三三三	山山油
杉本俊夫	友直	深沢	村上	山山油
鈴木真生				山山油



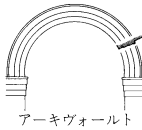
アー エー ゲーのタービンこうじょう【AEGの一工場】〔独〕AEG Turbinen Halle 近代建築の初頭を飾る代表的工場建築。P. ベーレンス設計、1908～09年。AEG (Allgemeine Elektrizitäts Gesellschaftゼネラル電気会社)のデザイン顧問として招かれたベーレンスが、



AEGのタービン工場

ベルリンに建てた一連の工場建築の最初のもの。三鉸式骨組による大胆で重厚な構造と、柱間および端部壁面の大きなガラス窓が巧みに組み合わせられ、鉄とガラスによる工場建築に初めて記念性を与えたものとして高く評価されている。内部はスパン25.6m、奥行20.7m、最高高さ約25mに及ぶ無柱の大空間となっている。この工場設計時代、W. グロピウスやミース ファン デル ローエが所員として働いており、大きな影響を受けている。

アーキヴォールト archivault 飾り追縁(罫)。アーチの前面ないし内面の縁形。特に中世の教会堂では正面扉口のアーキヴォールトは彫刻で豊かに飾られる。



アーキヴォールト

アーキテクト architect 建築家のこと。Architectの語源はギリシア語の arkhos(長)、-tekton(職人)であり、ローマや中世では特に建築の専門家を示すようになった。ルネサンス以降、施工に対して設計という知的な部分を示す語となり、近世に至って現在のようになり、施主と施工者の間に介在する統括者としての設計監理者を意味するようになった。

アーキトレヴ architrave ①ギリシア・ローマ建築において、エンタブレチュアの最下部を構成する水平の部分。ギリシア語では、エピステュリオン(epistytion)と呼ぶ。②一般に開口部の周りに付けられる装飾用の枠組み。→(図)エンタブレチュア

アーク arc 近接した電極間で、イオン化した媒体を通じて行われる放電現象。弧状になることが多く

高熱と白熱光を伴う。

アーク エア ガウジン グ法の一。炭素棒を電極として、主として直流によってアークを発生させ、これによって溶融した金属をホルダーの穴から炭素棒に平行して噴出する圧縮空気、連続的に吹き飛ばして行う。溶接部の開先加工、裏研(裏り)、欠陥部の除去などに多く用いられ、ガスガウジンより入熱量の少ない特徴がある。

アーク エアせつだん【一切断】arc air cutting 炭素アーク切断に圧縮空気を併用して、金属の切断を行う方法。炭素アーク切断が単に溶断であるのに対して、積極的に溶融金属を除去するので、切断能率が非常に良くなる。→アークせつだん

アーク スタッドようせつほう【一溶接法】arc stud welding 植込みボルトを鋼板に直(直)に溶接する方法。一般にフェールル(補強金輪)またはカートリッジを用い、短時間アークを出したのち圧着する方法が採られている。

アーク ストライク arc strike 溶接施工中、母材の溶接部以外の部分にアークを飛ばすこと。母材が高張力鋼などの場合には、この部分が急冷されて硬化するため欠陥となる危険がある。

アーク スポットようせつ【一溶接】arc spot welding 薄板の点溶接をする場合、アークを利用して2枚重ねの上板に小さな穴を明け、これに溶接棒からの溶接金属を注ぎ込んで接合すること。これには特殊のガンが用いられ、抵抗溶接と異なり母材の片面にガンを当てるだけで溶接ができ、また下側の母材が厚くても自由に溶接できる特徴がある。

アークせつだん【一切断】arc cutting 被切断物と電極との間にアークを発生させ、その熱を利用して金属を局部的に溶融切断すること。アーク切断には、炭素アーク切断、金属アーク切断、アークエア切断、酸素アーク切断、TIG切断、プラズマアーク切断など多くの方法がある。

アーク タイム arc time 溶接作業時間のなかで、段取り、棒の取替え、スラグの除去および開先の清掃などの作業を除いたアークを実際に発生している時間。一般に実働時間に対するアーク発生時間を百分率で表す。

アークとう【一灯】arc lamp 放電によるアークの輝きを利用する電灯。酸化物が被覆電極を有する超高压・高压水銀灯、ナトリウム灯、炭素アーク灯などのような熱電子放射式と、水銀陰極を有する太陽灯やクーパヒュイット水銀灯などのような電界電子放射式がある。

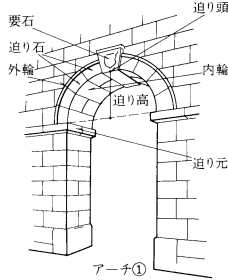
アークねつ【一熱】arc heat 電極間の放電によって生じる火炎の持つ熱。1808年イギリスのケンブリッジ大学のデービー教授が炭素棒電極間の火炎放電を認め、これを電弧光(electric arc)と命名し、熱源として用いられることを発見した。アークの放電は低電圧、高電流の放電で大きな熱量が得られる。このアーク熱を用いて行う溶接をアーク溶接という。

アークようせつ【一溶接】arc welding 母材と電極または二つの電極の間に発生するアークの熱を利用して溶接すること。消耗式は電極自身が溶加材となっ

盤条件の制約を受けやすいが、施工性、経済性の点から多用される。「カルウェルド工法」ともいう。

アーチ arch ①開口部

の上部の荷重を支えるために石や煉瓦を曲線形に積み上げた構造。木や鋼その他の材料による同形のものも同じ名称で呼ばれる。「迫(きり)ち」, 「迫(きり)ち」, 「拱(きり)ち」の訳語がある。アーチの形は基本的に円弧またはそれの幾つかの組合せによ



って出来るもので、時代により極めて多様である。それらの多くは、構造的な要求よりは、むしろ装飾的意図によって考案されたもので、曲線の種類により、それぞれに名称がある。⇨とがりアーチ ⇨テューダーアーチ ⇨ランセットアーチ ⇨オジョアーチ ②曲線状の架構で、荷重が主として軸圧縮力により支持点に伝達されるもの。⇨せいでいアーチ ⇨ふせいでいアーチ ③洋風庭園に用いられる庭門の一。緑陰を兼ねた添景物として置かれたり、彫塑の背景などに四つ目格子で造られたりする。フジ、キツバ, ツルバラなどをまわせる。「緑門」ともいう。

アーチェリーきょうぎじょう [一競技場] archery range

アーチェリー競技を行う施設。屋外競技では、男子は射程距離 90 m, 70 m, 50 m, 30 m, 女子は 70 m, 60 m, 50 m, 30 m の各 4 種目がある。射場は北向きとし、弓場は矢の破損を防ぐため芝張りとし、各競技者の射位幅は 2.5 m をとる。ほかに屋内で行われる射程 25 m, 18 m のインドアーチェリー、自然的地形のなかに設けられた、14 または 28 個の標的を順次うち進むコースで行われるフィールドアーチェリーの競技場がある。

アーチさよう [一作用] arching effect, arching ①

一般的に粉体あるいは粒体を支える壁体に加わる側圧において、壁体のわずかな移動に伴って粉体あるいは粒体中に迫(きり)合いを生じ、移動量の大きな部分から小さな部分への側圧の移動が起こる現象。例えば砂のような主として粗粒土から成る地盤において、地盤中の土の一部が変位した場合、その周りの土が押し込まれて迫り持たれる現象。②構造物のある部分を持つ実在の、または仮想の曲線に沿って、軸圧縮力により外力を伝達する性質。

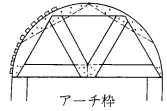
アーチャー、トーマス Thomas Archer [1668 ごろ

～1743] イギリスの建築家、オックスフォードのトリニティ カレッジで学んだ後、1693 年ごろまで外国に旅行し、とりわけローマのバロック建築を研究した。主な作品にバーミンガムの聖フィリップ教会 (1710～25)、ウェストミンスターの聖ジョン教会 (1714～28) がある。

アーチわく [一枠] centring アーチまたはヴォールト

を積む際の型枠およびその支保工。古くから石や煉瓦などの組積造に用いられてきたが、鉄筋コンクリート造アーチにも用いられる。また、従来は木製

が主であったが、鋼製も使われるようになった。「迫り枠(きり)ち」ともいう。隧道覆工に用いる場合にはセントルという。



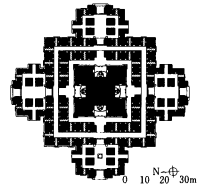
アーツ アンド クラフツ arts and crafts 19 世紀後期のイギリスで初めて用いられた術語で、主として手仕事によってデザインされた工芸品の全分野に対して与えられた語。

アーツ アンド クラフツうんどう [一運動] Arts and Crafts Movement

19 世紀後期にイギリスに興った工芸運動。W. モリスは工業生産の組織に抵抗するために手工作の復活を主張したが、自ら P. S. ウェップと共同して自宅を造り (1859 年、いわゆる「赤い家」Red House)、またラファエル前派の作家たちと共にモリス マーシャル フォークナー商會を設立して (1861)、生活用品のデザインを引き受けるなど意欲的に活動してこの運動の中心となった。1880 年代には、W. クレーン、C. R. アシュビーらによりクラフトの協会や学校が設立され、その影響は広まった。機械生産を否定するものであるとはいえ、芸術と社会とを結合しようとする強い姿勢のゆえに、近代運動の重要な出発点と見られている。⇨モリス

アーナンダ Ananda バガンに遺る最大級仏寺の一。

1091 年チャンスィッター王 (1084～1113) によって建てられたモン様式の代表作。基部の四面に仏立像を擁する太い柱礎を二重の回廊で囲繞し、外壁に設けた高窓から採光する巧みな空間構成をとっている。また外壁の一部に、多数の仏像を刻んだ青磁の裝飾版がはめ込まれているのも、この建築の重要な特色。



アーナンダ平面図(バガン)

アーバー →アーボアー

アーバンゼーション urbanization 都市化、市街化の意。

社会学、地理学、都市計画などの諸分野で用いられる。都市化と市街化は同義で用いられることもあるが、一般に都市化は都市への人口や産業の集中、都市的生活様式の浸透などの社会現象を指し、市街化はより狭く市街地の拡大、都市的土地利用への転換を指す。⇨としか

アーバンティ urbanity いわゆる都市らしさ。厳密に言えば、ある都市に固有な文化的な属性。都市文化のパターンの相違と都市文化の質の高さの両者が含まれる。その内容は、人により社会により、国により一定しない。総じて「アーバンティが高い」といった使われ方をする。

アーバン デザイン urban design 土地利用や交通計画

などの機能的側面から都市を計画する都市計画(シティプランニング)に対し、建築群、街路、広場、緑地などの都市空間構成要素の形態に主眼において都市を計画、設計すること。近代以前の都市づくりは機能的側面も空間的側面も一体にとらえられていたが、近代になって機能偏重の都市計画が主流にな

て溶着金属となる方式で、非消耗式は炭素やタングステンの電極を用い、別に溶加材を用いる方式である。また保護アークは大気からアークや溶融金属を保護するため、フラックスまたはガスを使用する方法。「電弧溶接」ともいう。

消耗式 (電極が溶ける方式)	裸アーク (ノンシールドアーク)	裸 スタッド 溶接 金属 アーク 溶接 被覆 アーク 溶接 ガスシールドスタッド溶接
	保護アーク (シールドアーク)	サブマージアーク溶接 イナートガスマタルアーク溶接 炭酸ガスアーク溶接 水蒸気溶接
非消耗式 (電極が溶けない方式)	裸アーク (ノンシールドアーク)	炭素 アーク 溶接 イナートガスタングステン溶接
	保護アーク (シールドアーク)	原子水素溶接

アークようせつき [一溶接機] arc welder アーク溶接を行うため、アークの電流、電圧をほぼ一定値に保つ装置で、電源の種類により交流溶接機と直流溶接機がある。「電弧溶接機」ともいう。

アークようせつぼう [一溶接棒] arc welding electrode 金属アーク溶接に用いる溶加材となる金属の電極棒。被覆を施してあるものと裸のものがある。特に自動アーク溶接に用いるものは裸で線状になっており、ワイヤと呼ばれる。

アークようせつぼうのさぎょうせい [一溶接棒の作業性] usability of an electrode 被覆アーク溶接棒の使いやすさ。例えば、アークの発生の難易、アークの安定性、スラグの流動性および剝離性、スパッタの多少、ガスおよびヒュームの発生状態など。

アークろうづけ [一鍛付け] arc brazing 母材と電極または二つの電極の間に発生するアークの熱で行う電気鍛付け。

アーケード arcade ①アーチを連続的に用いた吹放ちの空間。②商店街などの歩道の上部に、日除け、雨除けのために設けられる路上施設。特定行政庁が建築審査会の同意を得て許可したものでなければ建築できない(建築基準法第44条)。⇒がんぎ③ ③建物の外壁に付設して、一立面上に並んでいるアーチの連続。ロマネスクに多く見られる装飾的で通路を持たないもの、ゴシック教会堂などに見られる半吹放ちで外廊風のものがある。「列拱廊」ともいう。また装飾のために壁付きの柱とアーチによる場合は、盲アーケードという。

アーケードがい [一街] arcade street アーケードとは、もともとはアーチを連ねた歩廊や回廊状の通路をいうが、今日では屋根付きの街路や屋根付きの商店街を指す。

アーゴノミクス ergonomics ヨーロッパで使われる人間工学の呼称。これはギリシア語の作業を意味する ergon と、管理または法則を意味する nomos とを合成して作った新語。解剖学、生理学、心理学などを総合的に応用して人間の動作時の精神的あるいは肉体的に最も無理のない条件を見いだそうとする科学。アメリカにおけるヒューマン エンジニアリング (human engineering) と同意語である。「エルゴノミクス」ともいう。

アーザムきょうだい [一兄弟] Asam brothers ド

イツパロックの建築家兄弟。兄コスマス ダミアン (Cosmas Damian [1686~1739]) はフレスコ画家、弟エーギト クヴィリーン (Egid Quirin [1692~1750]) は彫刻家。ローマに赴き (1711~14)、C. フォンターナに学び、帰国後共同してロールやヴェルテンブルクの修道院聖堂の内部装飾に従事した。ミュンヘンのザント クヴィリーン (Egid Quirin [1692~1750]) は彫刻家。ローマに赴き (1711~14)、C. フォンターナに学び、帰国後共同してロールやヴェルテンブルクの修道院聖堂の内部装飾に従事した。ミュンヘンのザント クヴィリーン (Egid Quirin [1692~1750]) は、光と色の入り混じった幻想的な空間を実現したパロックからロココへの過渡期の様式を示す傑作。

アーザムせいどう [一聖堂] (独) Asamkirche →ザンクト ヨハン ネポムクせいどう

アース アンカーこうぼう [一工法] earth anchor method 山留め壁を支持する架構法の一。壁の背面の地山にアンカーを設け、アンカーに腹起しを緊結して山留め壁を受ける方法。建物の浮上を阻止するために建物を地盤に固定するのにも用いる。根切り内の空間が開放され、施工の利点が大きいが、反面、周囲の状況、土質、アンカーに用いる工法の施工性および経済性に左右される。

アースアンカーようくつききかい [一用掘削機械] boring machine for anchorage アースアンカーを施工するため、地盤や岩盤を回転や打撃により掘削する機械。大型のものには自走できるようクローラ搭載型のものもある。

アース オーガー earth auger 電動機、減速機の前端にオーガーヘッドを有するスクリューを装備し、地中に穿孔する機械。低騒音、低振動で、基礎杭、土留め壁、遮水壁などの造成に使用される。主なオーガー工法としてはPIP工法、CIP工法、MIP工法、プレボーリング工法、中掘り工法などがある。

アース カラー earth colour 自然に存在する土、草木に類する色のこと。茶系、緑系の色を指す。

アースキン, ラルフ Ralph Erskine (1914~) スウェーデンの現代建築家。イギリスに生まれ、リジェント ストリート工科大学で建築を学ぶ。1939年にスウェーデンに移住し、ストックホルムの王立美術学校に学び、1946年から建築家活動に入る。壁を表現の核に据えた住宅、集合住宅を生み出したことで知られる。地域計画、コミュニティ施設計画でも多くの秀作を残した。

アースドリル earth drill 回転バケットによる地盤掘削機。掘削機をトラックに装備したものとクローラに装備したものがある。掘削径は300~1200mmで、拡大掘りバケットを使用すれば3000mmまで掘削可能な機械もある。

アースドリルこうぼう [一工法] earth drill method 元来はアメリカのカルウェルド社の考案開発したアースドリルと呼ばれる掘削機を用いた、径1.0~2.0m程度の大口径場所打ちコンクリート杭作製のための掘削工法の一。掘削用のバケットをクレーパーと呼ばれる角形断面の棒を介して回転して掘削し、バケット内に土砂が溜まったとき引き上げて排出する。通常ノーケーシングで行われるので、掘削時の孔壁保護のため安定液工法が併用される。目的の深さに達したとき、あらかじめ組み立てておいた鉄筋かごを挿入してコンクリート打設を行う。比較的地